

製品名: MOR-1 ウサギポリクローナル抗体**カタログ番号: APRab14031**

研究使用のみ

概要

説明	ウサギポリクローナル抗体
宿主	うさぎ
応用	WB,IHC,ICC/IF,ELISA
反応性	ヒト、ラット、マウス
標識	非共役
修飾	未修正
アイソタイプ	IgG
クローン性	ポリクローナル
形態	液体
濃度	1mg/ml
保存	アリコートし、-20°Cで保存してください（12ヶ月有効）。凍結/融解サイクルを避けてください。
輸送	氷袋
バッファー	50% グリセロール、0.5% 保護タンパク質、0.02% 新タイプ防腐剤 N を含む PBS 液。
精製	アフィニティー精製

応用

希釈倍率	WB 1:500-1:2000,IHC 1:100-1:300,ICC/IF 1:50-1:200,ELISA 1:20000-1:40000
分子量	48kDa

抗原情報

遺伝子名	OPRM1
別名	OPRM1; MOR1; Mu-type opioid receptor; M-OR-1; MOR-1; Mu opiate receptor; Mu opioid receptor; MOP; hMOP
遺伝子 ID	4988.0
SwissProt ID	P35372
免疫原	抗血清はヒト OPRM1 由来の合成ペプチドに対して作製された。アミノ酸範囲: 21-70

背景

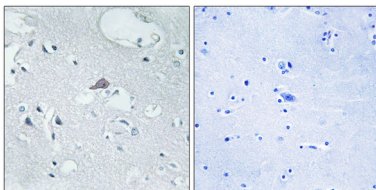
この遺伝子は、ヒトの少なくとも3つのオピオイド受容体の1つ、 μ オピオイド受容体 (MOR) をコードしています。MORは、 β -

エンドルフィンやエンケファリンなどの内因性オピオイドペプチドやオピオイド鎮痛剤の主な標的ですが、MORはまた、ドーパミン系の調節を介して、ニコチン、コカイン、アルコールなどの他の乱用薬物への依存にも重要な役割を果たしています。NM_001008503.2:c.118A>G アレルは、オピオイドおよびアルコール依存症、ならびに疼痛感受性の変動と関連付けられていますが、原因となる役割を持つという証拠は矛盾しています。この遺伝子には、異なるアイソフォームをコードする複数の転写バリエーションが見つかっています。標準的な MOR は7つの膜貫通型 G タンパク質共役受容体のスーパーファミリーに属しますが、この遺伝子の一部のアイソフォームは膜貫通ドメインを6つしか持ちません。[RefSeq 提供、2013年10月]機能: カルシウムイオン電流を減少させ、カリウムイオンコンダクタンスを増加させることで神経伝達物質の放出を阻害する。β-エンドルフィンの受容体。、オンライン情報: μオピオイド受容体エントリ,多型: バリエーション Asp-40 は、試験したほとんどのオピオイドペプチドおよびアルカロイドに対する結合親和性の変化を示さないが、μオピオイド受容体を活性化する内因性オピオイドであるβ-エンドルフィンとは、最も一般的な対立遺伝子型よりも約3倍強く結合する。、類似性: G タンパク質共役受容体1ファミリーに属する。、サブユニット: G(α)z/i2 サブユニットおよび RGSZ タンパク質、RGSZ17 および RGSZ20 と複合体を形成する。この複合体の形成は、μオピオイド受容体の脱感作をもたらす。RGSZ17 および RGSZ20 と相互作用します。

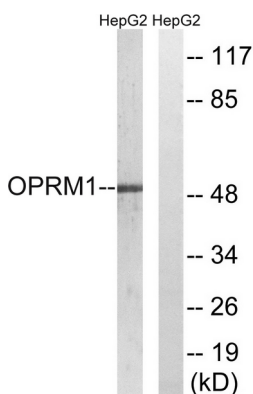
研究分野

神経活性リガンド-受容体相互作用;

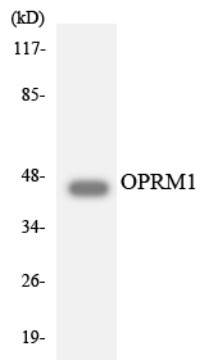
画像データ



OPRM1 抗体を用いたパラフィン包埋ヒト脳組織の免疫組織化学染色。右の写真は合成ペプチドでブロッキングした状態。



OPRM1 抗体を用いた HepG2 細胞ライセートのウェスタンブロット解析。右レーンは合成ペプチドでブロッキングされている。



OPRM1 抗体を使用した K562 細胞の溶解物のウエスタンブロット分析。